

客 刺

(乱丁・落丁の場合はお取替え致します)

昭和三十八年三月二十五日発行

定価三三〇円

著者 早乙女貢さおとめ みつぐ

発行者 石渡磨須子

整版者 内田柳次郎

東京都文京区高田農川町六〇

発行所 東方社

振替東京五七七四番
電話大塚 〇一八七三番

(印刷・邦文堂印刷所)

時代長編

刺

客

早乙女

貢

時代長編 刺 客

落花紛々 5

白刃の舞 53

螢のいのち 95

斬	壯	お
奸	士	ん
状	泣	な
	く	の
		炎

205	165	130
-----	-----	-----

装
幀

玉
井
ヒ
ロ
テ
ル

落花紛々

一

——美女だな、誰だろう？……

見たことのあるうしろ姿だった。

なよなよとした肩のあたり、しつとりと肉づいた腰の線……響がキラキラ光っている。

武家娘だ。歳ごろといい、優美なすがたといい、忘れるはずがない。それが思いだせないのだ。

——誰なんだ、よく知っているはずなのに……

有村治左衛門はいらいらした。

暑い。空も野も銀粉を撒まかれたようにぎらついている。まぶしい。頭がもやもやとしているのはそのせいかな？

——誰なんじゃ、おはんは？

思ひあまつて、呼びかけようとしたとき、くると女はふりかえつた。まるで心が通じたように。

あつ、と治左衛門は思つた。

武家娘ではない。

結綿ゆいわたの町娘だ。華やかな大柄花模様の振袖、くるくる日傘をまわして笑っている。リリリ……と涼しい音は、はこせこの端にさがっている鈴だ。

見たような笑顔。

——なんだお志保しほのではないか……

隣家の娘だ。見おぼえあるところではない。知り初めたころから胸に灼きついている。

だが、どうしてお志保が町娘の姿を？

その不審に應えるように、ふつと、お志保の姿が、変つた。武家娘の固い服装になつていた。花簪も日傘も持つていない。

お志保は微笑を湛えて、何かいつた。

聞えない。何かいつている。治左衛門はいらいらした。ねつとりと汗を額に感じた。

——な、なんといつているのだ！

——あら、いやですわ、聞えないふりをなさつて……

お志保は拗ねたように、優しく睨める。治左衛門は狼狽した。

——うんにや、聞えていもす……

その力みかたがおかしいのか、お志保は身をくねらして笑つた。治左衛門は赧あかくなつた。女の姿態は色めいて、うるんだような眸ひとみにはいつにない媚があふれている。

——有村さま、いつ奥様をお迎えになりますの？

——何を申される。おいはまだそんな……

——お国にはいいひとがお待ちになつてゐるんですつてね……

——そ、そげな者はおりもさん！

——存じておりますわ、お隠しなさいまでも、だめ……

——隠しはせん、おいは嘘を吐いたこつのなか男じや!!

かつとなつて、どなつた。

「あつ?……」

眼がさめた。

「——なんじや、夢を見ちよつたのか……」

早春には、強すぎる陽が障子に明るい。

全身に汗をかいていた。

有村治左衛門は身をおこしたが、まだぼんやりした頭で、夢のことを考えた。

——変な夢を見たものだ……

お志保の町娘すがたなど、夢でなければ見られないことだ。おかしくなつた。夢というやつはとてつもないことを見せてくれるものだが、さつきのことも、現実と憧憬がいりまじつてゐる。

そう思うと、おかしいより、腹がたつた。

「へげたれが！」

割れ鐘声で大喝してとびあがつた。

「こげな夢を見るのは、情にもろくなつとる証拠じや、いかんいかん柔弱を叩きなおさにや、いかんぞ」

今日、半刻おのれを休めんか、明日は一刻休むを許し、さらに一刻半と休みを欲すべし……士たる者すべからく鈍刀たらんよりは焼刀たるべし。

薩摩の士風は精神と肉体の弛緩^{しかん}を極度に排している。鈍刀はナマクラでぐにやりと曲るが焼火^{やき}加減の強すぎた刀は、曲らずに折れる。

むろん強靱にしてよく鉄石を断つ名刀たるにこしたことはないが、そうでなければ、なまけ者として長生するより、鍛練がすぎて死ぬほうが、薩摩隼人の本懐とすべきだ、という、すさまじい士風で

あつた。

有村治左衛門兼清、二十三になつたばかり若輩ながら、荒武者の雲集する薩摩でも若手劍士として一目おかれている。

ぬつと立つと、大たぶさの髷が鴨居につかえる六尺ゆたかの巨軀は、全身これ筋肉だ。

ぴんと針金を通したような血管のうねり、根瘤を盛りあげたような隆々たる肩や腕の頼もしさ。赤銅の肌には無数のすり傷打ち傷の痕をとどめている。

二

くろぐろとどろろを卷いた胸毛の汗を拭いもせず、治左衛門は「ふり刀」を差して庭へおりた。

早春の陽が、庭の土を温めている。貧弱な梅樹の芽がふくらんでいる。微風が汗の肌にこころよかつた。

「とうーっ！」

裂帛の気声とともに、春光を切つて、白刃が鞘走つた。

「おうりやーっ！ えい！ えい！ えい！！」

何というすさまじさだろう。あたかもそこに数十の敵影を見たかのように、前を斬り、右を斬り、

左を斬り、とんで背後を撫ぎ、身を沈めて前を払う——千変万化の凄絶な白刃の乱舞だった。

凄剣、薩摩のお国流と恐れられた自源流。じげんりゅう

自願流とも書くが、瀬戸口備前守を流祖とする、豪快そのもの、古武道の本然的剣法であつた。

江戸時代に入つて竹刀しなの稽古が普遍化した他流と比べてあまりに荒つぽい。立合の心得だとか組太刀とか形などにこだわらない。専ら実戦の練習だ。

他流のように、身を守るとは教えない。

身を捨ててこそ浮ぶ瀬もあれ、で、ただ初一念、敵を倒すことのみ重点を置く。根本的には相打ちに相手を倒せばいいのだ。

塚原卜伝のいわゆる「一ノ太刀」「二つ太刀」など形も極意書も伝わっていないが、当時の実戦的流儀として見ても、おそらくもつとも、この自源流と相通じていたのではないかといわれている。

したがって、入門初歩からして他と稽古のしかたがちがう。櫓の木をひとかかえほど束ねて固く縛つたやつを、根かぎり力のかぎり打たせる。木刀の折れるまでだ。腕の力をやしない斬撃の呼吸をおぼえる。

櫓の束の次は立木の股を殴る。裂けるまで殴りつづけるのだ。その次が、竹。孟宗のふとい奴をびゅんびゅんふりまわす。腕が凝ると、小柄こづかを刺して凝り血を出して、ササラに割れるまで、これをや

らせられる。

ここまでできたら、いよいよ自源流の実戦流たるところの千鳥打ち。

棒杭がつしり並べ立てた間を右左とすりぬけながら、えいえい！ と殴る。七八間の距離を、果なく、いきつ戻りつ走りぬけながら殴る、殴る、殴る。

練習を積むと、往復の速度も増し、打ちこみも烈しさを加える。しだいに棒杭が刀をかまえた敵影に見えてくる。そうすると、おのれの技を、一打ちごとに変えることもできてくる。袈裟がけ、胴斬り、唐竹割り、足払い等々、乱刃を斬りぬけるわ、ざが会得えとくできるのだ。

治左衛門が、いま、狂つたように身を翻し、あるいは左し、右し、おどろくべき跳躍を見せて、影なき影を切っているのはその千鳥打ちを空で演じているのである。

普通、木刀を用いるのだが、極意を得てからの治左衛門はおのれの一人稽古に、本身ほんみを使っている。すなわち、「ふり刀」である。

愛刀と酷似の安物を刀屋で探して、惜しみなく、これをふるつている。長さ、重さ、反りなど、そっくり愛刀そのままだからイザという場合、修業の時と同じ結果が得られる、というのが持論だった。

治左衛門は無慾恬淡な性格で豪放磊落、かなり野性的単純なところがあるから、怒りつばい。その

立腹を鎮めるには、この荒々しい鍛練が一番だつた。どんなおもしろくないときでも、すかつとする。しきりに刀をうち振つていると、隣家ざかいの生垣のところに、白い顔が見えた。

「おお……」

お志保か、と思い、治左衛門は動きをやめた。お志保ではなく、その母おりくだつた。

治左衛門は破顔した。

「やかましゆう御座つたろう、つい、熱がいりもしたゆえ」

「いいえ……」おりくは丁寧に挨拶して、「おみごとでございます、つい見惚れておりました」

「いやあ、これは恥じ入りもす」

照れた。髪がみだれて、上半身淋漓たる汗だ。あわてて半晒の縞絆に肩をいれる。

おりくは頬を染めて、目を伏せた。

夫を失つてまだ幾らもたつていない。治左衛門の活々した筋肉、汗にひかる胸毛などがけものめいて、なまなましい男性を匂いたたせている。

治左衛門には年増女の心情などわからないが、頬を染めたおりくの恥じらいに、とまどいをおぼえた。

十七の娘があるのだから、三十路も半ばをすぎているはずだが、品のいい美貌と、しつとりとした

肉づきのせいか、お志保と姉妹といつても通るであらうおりくだつた。

夫が獄死した直後はがつくりとして急に老け、このまま老いてゆくのではないかと思われたが、ちかごろまた美しさをとりもどしたようである。

たとえていえば白萩の楚々たる感じだつた。

治左衛門は好意を抱いているが、無骨者だから口下手だ。

女の心をときほぐし、和ませるような言葉を知らない。

やたらに汗を拭いていると、おりくが、

「あの……」と、思いきつたように、目をあげて、「少し、お話し申しあげたいことが」と、いった。

どきりとして、治左衛門は、また汗を拭つた。

おりくもかれを正視できないようであつた。目をそらして、話をつづけようとしたが、なぜか、急にそわそわして、

「あの、いづれ後ほど、改めまして……」

逃げるように、家のなかへ入つていった。

三

「どうしたというのだ」

わけがわからない。

治左衛門は、また片脱ぎになった。

「チェスト！」

白蛇一閃、壮軀そうくが黒土を蹴った。

そのとき、裏の小路に足音と人影がした。

「ほう、やつちよるやつちよる」

「相変らずだな……」

傍若無人な声で、木戸を押して入ってきたのは、伊牟田いむた尚平しやうへいと田中新兵衛の二人。

やはり藩士で少壮気鋭、二人とも自源流の使い手だ。新兵衛は船頭上がりだが身分低きにもかかわらず豪毅の風と卓抜たくはつした剣術をもつて、士分に取立てを蒙り、いまでは薩摩の攘夷派の一人として、活躍していた。

「いまの婦人は」

と、伊牟田がしやくれた顎にきびの面皰をつまみながらいった。

「お志保さんじゃないのか」

「ちがう」

おりくはこいつらを見たから、話をやめてひつこんだにちがいない。

「ちがうって？」

にやにやと、不謹慎な笑いを泛べて伊牟田は、のびあがるようにした。

「お志保さんじゃないとすると、おりくどのか」

「む」

「ほう、あんなに美人だつたかな。いろは年増にとどめをさすというが、ふうん」

これが伊牟田の悪い癖だ。

江戸詰めをいいことに吉原を初め岡場所を遊び歩いて、ひどく通人ぶつている。

腕が立つからまだいいが、女人を蔑視すること甚しい薩摩隼人のなかでは、この風流ぶりをひどく嫌っている者が多いのも事実である。

「有村」

と、のぞきこむような目つきになつて、